

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	吉澤 あすな
論文題目	多宗教・多民族社会における「共棲」の政治 —南部フィリピンの日常生活、エリート支配、和平プロセス—		
(論文内容の要旨)			
<p>南部フィリピンでは、1970年代から先住民であるムスリムが中心となり自決権を求める武装闘争が継続し、ムスリムとクリスチャンの分断と対立が強調されてきた。本論文の目的は、第一に、人々の日常においてムスリムとクリスチャンの多様な関係性と差異の動態を明らかにすることであり、第二に、日常において他者と生きるための実践が、地方政治や和平プロセスにどのような影響を与えているのかを明らかにすることである。</p> <p>序論では、南部フィリピンのムスリム・クリスチャン関係の先行研究を概観し、分断的な差異が表出する契機と、それらの差異を変容させる人々の実践との相互作用を論じる必要性を指摘したうえで本論文の枠組みを提示する。即ち本論文では、他者の存在によって「引き裂かれ」非一貫的になる自己のあり方に基づく他者との関係性を「共棲」とし、それを可能にする実践として「他者との関係についての正当化の説明、または説得的言辞」としてのレトリックの作用に着目し、異なる集団をつなぐ「架橋レトリック」が人々の対話、関係構築、選好や価値変容を促す側面に着目し、それが絶えず変容・再編されるプロセスを考察する。</p> <p>第1章では、入植者植民地主義によって南部フィリピンの空間と民族間の差異が再編されてきた過程を明らかにする。独立後、フィリピン中北部からのクリスチャン住民の入植によって先住民の排除と収奪が進んだ。さらに資本主義経済においてムスリムとクリスチャンを横断する形で周縁化された人々の排除と収奪は複雑化し、両者を分かちコロニアルな差異の二分法は暴力の表出をめぐって再生産されている。</p> <p>第2章から第4章では、南部フィリピン・イリガン市の日常生活において分断的な差異が再生産・強化され、同時に様々な架橋レトリックによって新たな関係性が生まれる複数の差異の力学を明らかにする。第2章では、貧困層集住地区におけるムスリムとクリスチャンの隣人関係を考察する。人々が暴力への恐れという感情を抱き隣人に不安を覚えつつも頻繁な相互接触を行うのは、「生の脆弱さ」を共有しているからである。第3章では、マラナオ・ムスリム男性とビサヤ・クリスチャン女性の通婚実践を取り上げる。通婚における「恋愛」が架橋レトリックとなって宗教・民族の差異を後景化させる。その語りは、個人の感情に基づく親密な関係を表し、分断的な差異に対抗する関係性として位置づけられる。ただしこの組合せの通婚は、ジェンダーと民族の差異の非対称性を内包する。「ハーフ」の子ども達や一夫多妻婚を経験した女性達</p>			

は、交差する複数の差異を生きており、その「引き裂かれ」の語りは差異を明るみに出し、自他をつなぎ直す可能性が示唆される。第4章では、「バリック・イスラーム」（キリスト教からイスラームへの改宗者）の宗教実践を通して、明確な境界線を持つ宗教間の「共存」や「対話」とは異なり、他者とのかかわりの中で揺れ動く自己に基づく宗教の「共棲」の可能性を論じる。多くのバリック・イスラームは、改宗を断絶的な経験ではなく、真実の宗教を希求する「道」における連続として理解する。イスラームの実践と、身体のままならなさや異教徒となった家族との関係により、宗教実践や帰属のあり方は混淆し揺らぐ。しかしそれも、その場で共有される経験によって暗黙の了解事項とされる。

第5章から第7章では、日常における「共棲」に向けた実践が、マクロな政治といかに関連するのかを検討する。架橋レトリックの形成には連続性が見られるものの、その変容・再編の契機は、日常の論理と異なる。第5章では地方政治に着目する。北ラナオ州において地方エリートが一旦は分断を利用する政治を行った後、政治家間の通婚を契機として「団結」という架橋レトリックによって政治的正統性を確立した。これは、政治社会的な環境、政治家の個人的経験、ならびに住民の反応という複数の要素の相互作用によって応答的に形成される。通婚の架橋レトリックと政治王朝化が結びついた場合、レトリックの大きな変容・再編は生じにくいことを指摘する。ただしこの架橋レトリックは、世代交代によって劇的に変容する可能性がある。第6章では、日常世界や地方政治よりさらに明確に「共棲」の困難が前景化してきた南部フィリピンの「領域的自治」による和平プロセスに焦点を当てる。ムスリム先住民による先祖伝来の領域における自決権確立を目指す運動は、クリスチャン入植者と「共に棲む」こととの間で揺れ動き、架橋と結束の様々なレトリックを形成してきた。2008年の先祖伝来の領域に関する合意覚書（MOA-AD）をめぐるのは、暴力への「恐れ」の感情がムスリムとクリスチャンとの間に深刻な分断を生じさせたが、同時にその感情を軸として架橋レトリックが形成された。他方、「引き裂かれ」の語りおよび身体経験や情動は、架橋レトリックを形成しにくい。これは、分離運動ならびに自治地域の「創設」の過程においては、揺らぎや曖昧さを含む実践は反映され辛いためだと考えられる。第7章では、2019年に成立したバンサモロ暫定自治地域における新たな動きを考察する。自治地域における具体的な政策・制度策定および運用には、人々の生活実態により根差した形での異なる利害や価値観の調整を必要とする。そのため、自治地域の創設に向けた動きと比較し、日常の「共棲」実践が反映される余地が大きいことが示唆される。

終章では、各章の議論をまとめ、今後の課題を提示する。

(論文審査の結果の要旨)

宗教や民族を超えた共生はグローバルな課題であり、東南アジアはまさに多宗教多民族の混住する地域として知られる。しかしその東南アジアでも、長きにわたり民族や宗教の対立が終息しがたく顕著に続いてきた場所がいくつかあり、ムスリムとクリスチャンの宗教・民族間の分断と対立が喧伝されてきた南部フィリピンはその最たる例といえる。本論文は、その南部ミンダナオ地域において、日常的にムスリムとクリスチャンが相対する多様な場面における相互の関係性について、民族誌的記述と分析を提示する。さらに、そうした日常実践が地方政治や和平プロセスといったよりマクロな政治過程とどの様に響きあっているかをも射程に入れて、変動する差異を踏まえた関係の動態を「共棲」をキーワードに分析する。このように複層的な分析・理解を統合する試みこそが本論文の特徴である。筆者は2013年から2014年の一年半近くにわたるイリガン市における長期滞在調査、さらに2020年および2022年にコタバト市やマニラ首都圏などで地域を跨いだ民族誌的調査やインタビュー調査と文献収集を実施しており、本論文はそのようにして収集した豊富なデータに基づいた労作である。

本論文の学術的貢献としては、以下の点が挙げられる。

第一に、日常生活におけるムスリム・クリスチャン関係の動態的な理解を可能にする豊かな民族誌的記述である。イリガン市の貧困層が集住する地区においてムスリム世帯で長期住込み調査を行い、軒を並べた両者の息づかいが聞こえる環境にある日常の相互交渉のなかで、特にムスリムが偏見や差別を受けつつも、どの様に両者住民が貧困と生の脆弱性を共有しつつ分断と共棲を生きているかを、生活の細やかな場面からとらえている。またクリスチャン男性とムスリム女性の通婚関係を、多くの事例やインタビューから分析している。恋愛のレトリックと裏腹に通婚を通じて価値や規範の相克があり、かつ決して水平ではない関係にあって、当事者にとって自己の一貫性を保ちがたく葛藤を抱えるまま、なおもつながる可能性を描き出している。

第二に、バリック・イスラーム（キリスト教からイスラームへ改宗した者）にとっての改宗が生き活きと説得的に描かれている。その記述を通じて、当事者が改宗の語りと実践によって差異を曖昧化していく過程を記述し、バリック・イスラームによるイスラームへの改宗を、キリスト教との連続性のなかで理解されるものと論じる一方で、改宗者家族のなかで生じる葛藤を葬儀などの場面から克明に描いている。また同じムスリムでも民族間の差別があることや、改宗した女性が女性同士で経験するつながりを描き、宗教一辺倒ではない多様な差異とつながりが交錯する場面を浮き彫りにしている。

以上、二つの点について本論文は記述の厚みと分析を通じて共棲の困難と可能性を個々人の情動に立ち入って説得力とリアリティをもって論じており、その民族誌的論述は圧巻である。

第三に、本論文は対面的な情報収集に基づくミクロな民族誌的記述に加えて、照準を変えたマクロな政治におけるムスリム・クリスチャン関係をも分析している。特に、両者の通婚を实践したエリート政治家による架橋から団結へのレトリックと政治的正当性の獲得および、それに基づく統治のあり方を分析している。また現地におけるムスリムの自治地域創設とその運動をめぐって生じた紛争や恐れなどの感情など、諸要素が解きほぐしえず絡まる状況にあつてレトリックの変化や関係の再編を分析している。

第四に、このように多層多地域にわたりムスリム・クリスチャン関係を描いたうえで、世界の他の紛争地域の先行研究を参照・検討しつつ、自らの事例を分析するための「架橋レトリックと結束レトリック」「共棲」「引き裂かれ」など自身で定義した概念を用いて、適用可能な理論的枠組みを模索して議論を展開している。

論文を通じて随所にみられる現地調査からの引用、人物像やエピソード、その理論的考察のゆえに、読み応えのある記述になっている。と同時に、分断の厳しさと人々の生活のなかで、政治的社会的な関係においてこれを乗り越えようとする営みが描かれ、分断と差異を抱える人々の共棲をミクロな民族誌とより大きな政治の動きとを結んで理論化する意欲的かつ独創的な研究である。

よつて、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2023年7月7日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。